2020年11月15日　　ゼファニヤ5:1-7
聖霊降臨後第23主日　　1テサ5:1-10
東京聖三一教会　　マタイ 25:14-15、19-29

主人と一緒に喜んでくれ

韓国では毎年11月中旬頃になると大騒ぎが起こります。それは、全国のすべての受験生が受ける大学に入るための予備試験の日があるからです。入試の競争は激しく、この試験結果によって自分の人生が決まると思っているため、皆力を尽くしています。大学入試だけではありません。韓国では会社に就職する時にも試験をしますし、大企業では昇進する時にも試験をします。そのため、試験によって人生が変わると考える人が多いです。

韓国では神学校にも入学試験があります。主に聖書と英語の試験と面接があります。毎年何人かが落ちています。神学校に入学してもすべての神学生が卒業するわけではありません。論文はもちろん卒業試験があります。私の同級生のうち二人は卒業試験に落ちて卒業できませんでした。神学校の卒業後にも執事試験と司祭試験があります。このように多くの人々は生きていく間数多くの試験を受けています。それゆえ、多くの人々は試験の結果によって人生が変わると思っています。

ところで、「神の国」はどうでしょうか。もしかしたら、生きていく間絶えず試験を受けてきた人々にとっては、「神の国に入るためにも試験がある」と思うかもしれません。また、試験の結果によって「神の国」での人生も違うものになると思うかもしれません。そして、今日ご一緒に読んだ福音書の内容も、まるで試験を通して人生が決まるかのように理解されます。はたして、本当にそうなのでしょうか。

しかし、このような考えは全く誤解です。今日の福音書の内容は、「試験によって人生が変わる」という意味ではありません。イエス様は、「私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マルコ2:17)とおっしゃいました。またイエス様は、ファリサイ派の人々と律法学者たちの敬虔な暮らしとは全く違う「徴税人や娼婦たちの方が、彼らより先に神の国に入るだろう」(マタイ 21:31)とおっしゃいました。したがって、試験によって神の国に入ったり、「神の国での人生」が決まったりするものではありません。

それでは、今日ご一緒に読んだ福音書の喩はどういう意味でしょうか。今日の喩は、「ファリサイ派の人々と律法学者たちのように生きていってはならない」ということを教えるためのものです。ファリサイ派の人々と律法学者たちはモーセの律法と神殿を受け継ぎました。そして神様の祝福の約束と神様に選ばれた民としての誇りをも受け継ぎました。けれども彼らは、1タラントンを地の中に隠しておいた僕のように、律法、神様の約束、選ばれた民としての誇りなどのすべてのものを地の中に隠しておきながら生きていきました。それでイエス様は、彼らのように生きていってはならない、ということを強調するためにこの喩をおっしゃったのです。殊に強調されるのは、「僕は決まった仕事ばかりしてはならないし、主人の意志に従って、自発的にしなければならない」ということです。

3人の僕はそれぞれ5タラントン、2タラントン、1タラントンをもらいました。これは、

主人の資産管理のためのポートフォリオとも言えるでしょうが、「神の国のために各々がそれぞれ努力しなければならない」という意味です。

ところで、この１タラントンというお金はどれほどの価値があるでしょうか。当時の 1 タラントンは労働者の 6,000 日分の賃金、すなわち労働者 1 人が 20 年間働いて得るほどの大金でした。主人が旅行に出かける時、お金をそれぞれの僕たちに預けたのは、単に盗まれたり失うことのないようにきちんと保管しなさい、という意味ではありません。お金を増やしなさいという意味でした。

主人が帰ってきたのは「かなりの日がたってから」でした。ですからその間、誰でも怠け者になる誘惑があったと推測できます。けれども、1 番目の僕と２番目の僕はその怠け者になる誘惑を退け、自分がやるべきことに力を尽くしました。その結果、二人は自分が受け取ったほどのお金を儲けました。そして主人から褒められました。ここで注目されるのは、二人の僕がそれぞれ儲けたタラントンは違うけれども各々が力を尽くした末「同じ称賛を受けた」ということです。これは、各々が授かる才能はそれぞれ違うけれども、各々が授かったそれぞれの才能を通して力を尽くして生きていけば、私たちも神様より「忠実な良い僕」という称賛にあずかる、という意味です。

けれども、３番目の僕は納得のできないことをしました。彼は、預けられたお金を地の中に隠しておきました。彼は、それが何より安全であると思ったかもしれません。けれどもそれは主人の意にそぐわないことでした。そのため叱られてしまったのです。その 1 タラントンを銀行に入れておいたら利息付きで返してもらえたはずです。聖書に詳しい方は、「聖書と律法によれば、利子をもらってはいけないでしょう」とおっしゃるかもしれません。そうです。聖書には、「兄弟や隣人から利子を受け取ってはならない」と記されています。しかし、この喩話は、ギリシアとローマの影響を受けて利子を受け取る社会になってから起こった出来事です。なので、３番目の僕は弁解の余地はありません。

けれども、何より大きな問題は、３番目の僕が自分の過ちに気が付いていないということです。いや、むしろ主人を非難するようなことを言いました。彼はこのように言いました。

「御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていました」（マタイ 25:24）

つまり、主人は貪欲な人であるということです。本当に主人は貪欲な人でしょうか。それは、主人がやったことを見ればよく分かります。主人は３番目の僕にこのように言いました。

「さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントンを持っている者に与えよ。」（マタイ 25:28）

この一文を通して主人は、1 番目の僕に与えた 5 タラントンとその僕が儲けた 5 タラントン、そして３番目の僕が持っていた 1 タラントンまで全部 1 番目の僕に与えてくれたのが分かります。このような主人を貪欲な人であると言えるでしょうか。主人の人柄が分かるのはこれだけではありません。主人は１番目の僕と２番目の僕にこのように言いました。

「主人と一緒に喜んでくれ」（マタイ 25：21）

この「喜ぶ」という言葉は「宴会」を楽しむ時に使う言葉です。ですから主人は二人の僕のために宴会を開いてくれたのが分かります。それで二人の僕は宴会の主人公になりました。彼

らはどんなに嬉しかったでしょうか。これを通して私たちは決して、主人は貪欲な人であるとは言えないでしょう。

当時の貨幣の単位であるギリシア語のタラントンとは、才能や技量、また芸能人を意味する耳慣れた英語のタレントになりました。そして今の世の人々は皆がタレントを持つように願っていますし、タレントになりたいと願っている人も多くなりました。けれども私たちにとっては、このような意味のタレント、つまり、才能、技量としてのタレントより一層関心を持たなければならないことがあります。それは「主に対する態度」です。つまり、私たちが神様の恵みによってそれぞれの才能と技量を持ち、それをどう使うかも重要ですが、信仰者にとってもっと大事なのは「主に対する態度である」ということです。それは、今日の福音書でいうと、主人が見たのも「僕たちの態度」であり、神様も私たちの「態度」を大切に思っておられるということです。それで、「信仰とは態度である」とも言えるでしょう。3番目の僕は、主人にこのように言いました。

「ご覧ください。これがあなたのお金です。」（マタイ 25：25）

ところでこの言葉は、当時の商取引の文書で、「私はこれ以上責任を負わない」という意味で使った言葉です。これを通して 3 番目の僕が主人に対してどういう「態度」を持っていたのかが分かるでしょう。

さて、来主日で教会暦の一年が終わりになり、11 月 29 日から新しい一年が始まります。そこで聖書日課は、「主が再び来られる日」のことを教え、目覚めた姿で生きていくことを教えてくれています。ですから今日ご一緒に読んだ「ゼファニヤ書」は、「主の日」に、怠け者の姿で生きている人々は神様に厳しく叱られる、ということを示しています。すこし恐ろしいです。けれども、私たちが「光の子、昼の子」として揺るぎない信仰を持って生きていけば、むしろ喜びを得ることになります。今日ご一緒に読んだテサロニケ書にはこのように記されています。

「神は、私たちを怒りに定められたのではなく、私たちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです。」（1 テサ 5:8）

そしてまた、このように勧めています。

「私たちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいましょう。」（1 テサ 5:8）

私たちが信仰者として生きていく態度は、信仰と愛を常に胸に抱き、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んで生きていくことです。これが、今日の福音書に出てくる１番目と２番目の僕たちの姿だったとも言えるでしょう。私たちがこのような信仰と態度をもって堂々と生きていけば、主人が僕たちに宴会を開いてくれたように、神様は私たちに恵みを施してくださるでしょう。

この一週も、「主の日」を待ち望みながら、堂々と生き、神様の豊かな恵みと祝福を受けられますように心からお祈りいたします。